

ゲーム間連結を引き起こす心理プロセス – 社会的ジレンマ状況と繰り返し囚人のジレンマ状況における検討

稲葉美里

指導教官：高橋伸幸

これまで社会科学の諸分野は、人間社会のそれぞれの側面に焦点を当て、独自の関心に基づいた研究を行ってきた(Broom *et al.*, 1981)。しかし近年、個別の学問分野で得られた知見を現実の社会で見られる社会現象や人間行動にどのように関連づけることができるかが問題となっている。例えば Granovetter(1985)は、現実の人々の経済活動に焦点を当て、経済学で用いられる完全競争市場における合理性からは予測できない行動を人々がとる場合があることを指摘している。

Granovetter(1985)は、人々が経済学の想定とは異なる行動をとるのは、そこに存在する社会構造や社会関係が経済活動にも影響しているためであると主張している。このようにある状況が周囲に存在する他の状況の影響を受けている状態を、Granovetter(1985)は「埋め込み(embeddedness)」と呼んでおり、人間の社会行動の理解にこの考え方をを用いることの重要性を指摘している。同様の概念として、Aoki(2001)はドメイン(領域)間の「連結(linkage)」という考え方を提案している。これらはどちらの概念も、2つ以上の異なる状況間に何らかの相互影響関係が存在することを意味するものである。埋め込みや連結という概念を導入することによって、これまで説明できなかった人間の行動や社会現象を説明できる可能性がある。その一つが、連結による協力問題の解決である。

この点に関しては近年、社会的ジレンマ状況と他の状況の連結によって、社会的ジレンマ状況での相互協力が促進されることが、いくつかの実証研究で示されている(Milinski *et al.*, 2002; 品田, 2005; Vyrastekova & van Soest, 2007)。実験において人々は、社会的ジレンマ状況での評判を用いて、他の状況での行動を決定するという連結行動をとる。このような行動が選択的誘因として働くために、社会的ジレンマ状況での相互協力が促進されるのである。しかしこれらの先行研究では、なぜこれらの状況が連結されるのかは説明されていない。人々は、なぜ社会的ジレンマ状況での評判を用いて、他の状況での行動を決定するのだろうか。本研究では、人々が連結行動をとる際のメカニズムを明らかにするために2つの実験を行った。なお、実験では社会的ジレンマ状況(SD)と繰り返し囚人のジレンマ状況(PD)の連結に着目した。

SDとPDの間での連結行動の究極要因を、Aoki(2001)は、社会において人々が「SDで協力しなかった人は、その後の繰り返しPDで周囲の他者から協力してもらえない」という予想を共有している場合に、SDで協力することがNash均衡となることを主張している。これを本研究では共有予想説と呼ぶ。まず、第1実験では、この共有予想説の妥当

性を検討するために、人々が共有予想説に整合したデザインの心理プロセスによってのみ連結行動をとるのか否かを検討した。そのために、共有予想に基づいて他者の行動を予測することのできない実験状況を作り、そのような状況でも人々が連結行動をとるのかどうかを調べた。共有予想説が連結行動の唯一の説明原理ならば、このような状況では人々は連結行動をとらないはずである。実験の結果、PDでの協力率は、相手がSD非協力者の場合よりSD協力者の場合の方が高かった。この結果から、Aoki(2001)の共有予想説は連結行動の唯一の究極要因の説明ではない可能性が示され、人々は共有予想説からは想定されない別の心理プロセスによっても連結行動を取ることが示された。また事後質問紙の分析から、相手の印象を形成し、それによって相手の行動を予測するという心理プロセスによって人々が連結行動をとっている可能性が示された。

そこで第2実験では、人々の連結行動は、相手のSD行動の観察から、印象を形成し、相手のPDにおける行動を予測するという心理プロセスによって、生起しているのかどうかを検討した。そのために、相手のSD行動を見て印象を形成するという部分に着目した。印象形成を行うには、相手の行動の原因を相手の内的な属性に帰属できることが必須であると考え、SD行動を相手の内的属性に帰属可能か否かを条件として操作し、人々が連結行動をとるか否かを検討した。実験の結果、SD行動の内的帰属が可能な条件では、PDでの提供率は、相手がSD非協力者の場合よりSD協力者の場合の方が高かった。しかし、内的帰属が不可能な条件では、相手がSD協力者であってもSD非協力者であっても、PDでの提供率に差は見られなかった。つまり、人々は相手のSD行動を内的に帰属することが可能な場合にのみ連結行動をとるということである。また質問紙の分析から、連結行動は、相手の印象を形成することと、相手の次の行動を予測することによって引き起こされていることが明らかになった。

これらの実験の結果から、社会的ジレンマ状況と繰り返し囚人のジレンマ状況の間での連結行動の至近要因について、共有予想に基づく予測(Aoki, 2001)だけでは説明できないタイプの連結行動が存在し、その連結行動は相手の印象を形成することと、相手の行動を予測することによって生じることが明らかになった。

それでは、共有予想には基づかずに、人々が行動予測や印象形成によって連結行動をとるのはなぜなのだろうか。今後は、このような心理プロセスを持っていることの究極要因を明らかにしていく必要があるだろう。また、今回明らかになった心理プロセスによって、社会的ジレンマ状況と繰り返し囚人のジレンマ状況以外の状況間での連結行動を説明することは可能なのだろうか。この点に関しても今後検討する必要があるだろう。